

# 伏見公民館だより

令和3年度第2号（令和3年11月発行）

(公財) 奈良市生涯学習財団  
伏見公民館

〒631-0841 奈良市青野町二丁目13番4号

TEL・FAX 0742-45-9864

E-mail fushimi@manabunara.jp



伏見公民館では、今年も秋の色づく花や樹木の中で、今までコロナ感染予防のために延期になっていた事業をおこなうことに明け暮れています。一つ一つの事業を通して、利用者や参加者の皆様に成就感や充実感を与えるいくことを常に考えながら企画運営をしていきたいと思っています。これからも楽しみにしてください。

さて、日を追うごとに冬支度の準備を整えているような今日この頃です。そして、冬至に向かって、夜の時間がどんどん長くなっています。一日がすごく早く感じてしまうので、ぼっとしていると、ただ時間だけが通り過ぎてゆく気がします。そのような中、コロナで大きく世の中が混沌と変化し、いま私たちは何が重要なのか、何を大切にしていかななくてはいけないのかがぼやけてきています。そんな中で、私はふと『論語』にたどり着きました。

『論語』は、古代中国の春秋戦国時代の頃、孔子とその高弟の言行を、孔子の死後に弟子が記録した書物です。儒教の経典である経書の一つで、朱子学における「四書」の一つとして数えられています。その内容の簡潔さから儒教入門書として広く普及し、中国の歴史を通じて最もよく読まれたベストセラーの一つです。昔からその読者層は知識人や学識層だけでなく、一般庶民や農民の教科書としても用いられていました。日本においても、『古事記』や「養老律令」などでも登場し、日本人の精神や道徳、心のよりどころとして大きな影響を与えました。また、『論語』に由来する故事成語は、計り知れません。

「和して同ぜず」（人と仲良く打ち解けても、道理に背いてまで人にへつらわないこと）

「徳は孤ならず」（徳のあるものは、決して孤立することなく、必ず従う者、助けるものがある）

「一を聞いて十を知る」（一端を聞いただけで全体を理解すること。理解が早く聡明であること）

「過ぎたるは猶及ばざるが如し」（適当な程度を超えているのは、不足と同じ。中庸が大切であるたとえ）

「径によらず」（小道を通らないで、大道を行く。人生においては近道をしなくて、正直にしたがい歩む）

「性相近し、習い相遠し」（人は生まれつきの天性に対して差はないが、後天的な習慣によって大きく違ってくる）

数え切れないほどの故事成語の中でも、特に気に入っているものを紹介しました。そこには忘れかけていた日本人の原風景があるような気がしませんか。セピア色に染まった「昭和」のあの頃を、皆さんも『論語』をガイドブックとして懐かしく思い出してみませんか。きっとそこには、いま忘れそうになっていたものや、失いそうになっていた大切なもの、そしてこれからの生き方のヒントも見つかるかもしれません。

何はともあれ、これから少しずつ寒くなっていきます。花や樹木は枯れたとしても、また来年の同じころには見事に蘇ることができますが、私たちはそのようなことはできません。くれぐれも心も体も健康でいられるように願っています。

玄関先の美しく可憐な菊の六つの鉢植えに勇気づけられながら……。

井貝



## こんな講座ありました

### 伏見女性フォーラム

11月9日、館外学習へ行きました。当公民館館長のガイドで興福寺周辺を歩き、元興寺本堂と秋季特別展を拝観しました。そしてこの日のメイン奈良町資料館では、資料館館長の南さんがならまちの庚申信仰についてのお話や、昔の貴重な生活道具、お店の看板等についてクイズを交えながら解説してくださいました。ケースの中に保管されている古道具を取り出し、実際にさわらせていただく機会もつくってくださったので、みなさんとても熱心に聞いておられました。



### 伏見みやび学級

11月17日、大阪ガス福祉財団より講師をお招きしました。前半は落語家さんによる落語の時間で、笑いながら心を元気にしていただきました。後半は、トレーナーさんによる頭の体操を取り入れながらの簡単なタオル体操をしていただき、筋肉をのばしながら体の機能を落とさない方法を指導いただきました。たのしく笑うことも体をむりのない範囲で動かすことも、元気で過ごすことにつながると思います。体操はぜひお家で実践していただきたいです。



## 職員をつぶやき

子どもと手を繋いで歩く銀杏並木の坂の道。風のいたずらで舞い落ちる木の葉を追いかけ、駆け出した姿が遠くなっていく。こここのところ謎の螺旋空間を彷徨う日々。いつの間にか坂の途中で立ちすくむ。何故かこの坂道を訪れるのはいつも黄色い雨が降りそそぐ時。季節の魔法で何かがとけあいながら、まざりあっていく不思議な場所。思い描いた憧れに手を伸ばし続けながら歩いたあの頃の自分が、小さく手を振る。気がつけばないはずの桜の色づいた葉が肩に一枚。「こっち〜！」逆光からの声に戸惑いを隠せないまま大きく風をすいこんで、風にもどす。声を頼りに歩きだせば琥珀色の扉に手が届きそうな気がして。再び繋いだ左手にあたたかさを感じながら、桜葉色の鍵を手新しい物語をはじめよう。この先の自分に「あの時はごめん」なんて言わないために…。

脇本

今年4月に伏見公民館に赴任して夏が過ぎ今は、もう晩秋となりました。早いもので、7か月の日時がたってしまいました。

ここへ来た頃は、コロナ禍でまだまだ大変な時期でしたが、最近ようやく落ち着き通常の仕事に戻りつつあります。

最近、貸館の予約数も増え通常通りくらいに戻ってきております。これも皆様方の協力して頂いたおかげです。

私におきましては、徐々に自主グループさんの事も分かるようになってまいりました。

まだまだ不慣れな点はご容赦ください。

今後とも頑張っていきたいと思っておりますのでよろしく願いいたします。

貴田

